

京都大学教育研究振興財団助成事業  
成果報告書

令和元年 7月 20日

公益財団法人京都大学教育研究振興財団  
会長 藤 洋 作 様

所属部局・研究科 人間・環境学研究科

職名・学年 研修員

氏 名 奥田 恒

助成の種類	令和元年度 ・ 国際研究集会発表助成		
研究集会名	第四回国際公共政策学会 (ICPP4)		
発表形式	<input type="checkbox"/> 招待 ・ <input checked="" type="checkbox"/> 口頭 ・ <input type="checkbox"/> ポスター ・ <input type="checkbox"/> その他( )		
発表題目	Policy Integration in Shrinking Society ---Strategies for Basic Municipalities in Japan---		
開催場所	コンコルディア大学、モントリオール、カナダ		
渡航期間	令和元年 6月 25日 ~ 令和元年 6月 30日		
成果の概要	タイトルは「成果の概要／報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料 <input checked="" type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> 有( )		
会計報告	交付を受けた助成金額	250,000 円	
	使用した助成金額	250,000 円	
	返納すべき助成金額	0 円	
	助成金の使途内訳	航空機代:	196,300円
		大会参加費:	25,000円
英文校正費:		28,700円	
当財団の助成について	(今回の助成に対する感想、今後の助成に望むこと等お書き下さい。助成事業の参考にさせていただきます。)		

# 成果の概要／奥田恒

奥田恒（人間・環境学研究科 研修員）

## 1. はじめに

この度、京都大学教育研究振興財団の国際研究集会発表助を受け、令和元年6月25日～同30日（移動日を含む。大会開催は同26日～28日）の日程で、第四回国際公共政策学会大会（The 4th edition of the International Conference on Public Policy: ICPP4）へ参加した。同大会は、隔年で開催される、世界最大規模の公共政策研究の研究大会である。

## 2. 大会参加の目的

第四回国際公共政策学会大会への参加目的は以下の二点である。第一に、私の研究である“Policy Integration in Shrinking Society---Strategies for Basic Municipalities in Japan---”を報告し、海外の政策研究者からフィードバックを受けることである。第二に、海外の政策研究者と交流し、今後の大会参加・出版のきっかけとすることである。

私は、善い政策をつくるための理論ならびに実践にかかわる、「政策デザイン論」を専門とするが、同分野を専門とする研究者は、日本にはほとんど存在しない。したがって、研究へのフィードバックならびに研究者どうしの交流を行うためには、同大会への参加が必要であった。

## 3. 報告概要ならびに研究面での成果

まず、第一の目的である研究報告について述べる。

私の報告である“Policy Integration in Shrinking Society”は、英語圏で発展した政策デザイン論の有用性を検討することを目的とする。具体的には、B・ガイ・ピーターズらが提唱しマイケル・ハウレットらが精緻化した、「政策統合論」というアプローチを主題とする。

その目的のため、現在、日本の地方自治改革に向けて提唱されている改革案ならびにそれへの批判を取り上げた。改革案への擁護論・批判を整理したのち、その論争に対して政策統合論がいかなる示唆を持つか、あるいは持たないかを検討した。それをもとに、現在の政策デザイン論がどのような方向に発展していく余地があるか述べた。

報告への主な建設的コメントは、以下の通りである。第一に、ハウレットらの政策統合論では議題設定段階への示唆が弱いのが、政策案をつくりあげることにより力点をおいた別のアプローチを採用すればよりよい見通しが得られるのではないかとのコメントを受けた。

第二に、地方自治改革に加えて、その改革下で個別の政策分野がどのような影響を受けるかについても論じた方がよいのではないかとのコメントを受けた。

建設的コメントと関連して、私が報告を行ったセッションでは、ジェニー・ルイス氏（オーストラリア・メルボルン大学）やテリー・ファンダイク氏（オランダ・フローニンゲン大学）が、具体的事例に触れつつ、政策案を作り上げるための相互交流や創造的過程について報告した。また、私の報告では、前述の B・ガイ・ピーターズ氏（アメリカ合衆国・ピッツバーグ大学）が司会を務め、報告へのコメントも行った。

#### 4. 海外研究者との交流面での成果

次に、第二の目的である政策デザイン研究者との交流、今後の情報発信について述べる。

まず、私が参加したセッションでは、前述の通り、私が行ってきた研究とは異なる力点を持つ政策デザイン研究者と交流することができた。例えば、私が専門とする政策統合論は政策専門家による合理的な問題解決に焦点を当てるものだが、これに対し、ルイス氏やファンダイク氏の研究は、政策デザインをより創造的かつ協同的なものと捉える。彼らとの交流は、今後、私が政策デザインを発展させるうえで、重要な視点を提供するものと考えられる。

それに加え、別のセッションにおいては、合理的な問題解決を目指す政策デザイン研究者とも、交流を持つことができた。例えば、マイケル・ハウレット氏（カナダ・サイモンフレイザー大学）やジルベルト・カパーノ氏（イタリア・ボローニャ大学）が挙げられる。彼らの報告は、それぞれ「政策デザインが持つ危険性」「さまざまな政策デザイン論の暗黙の前提とその比較」にかかわるものであり、私のこれまでの研究と直接的にかかわるものであった。彼らとの交流を通じ、未公開の報告論文を送ってもらうなどの成果を得た。また、特にハウレット氏からは、今年の12月に開催される予定の政策デザイン論の研究ワークショップ（於オーストラリア・メルボルン）の情報を教示され、参加の誘いをうけた。いずれも、今後私の研究を発展させるうえで、貴重な成果であるといえる。

#### 5. むすび

以上のように、この度の第四回国際公共政策学会大会への参加では、研究面・人的交流面の二点で成果を得られた。

特に、研究面では、私がこれまで進めてきた研究について最新の情報を得る一方、これまで手薄だった観点について情報を得ることができた。今回得た情報と人的交流を活かし、今後、国際学会へのさらなる大会参加や英語論文投稿を行う所存である。